

# 翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

## 目次

### 翻訳についての断章

山岡洋一

#### - 翻訳という曲芸

翻訳では、ひとつの本を訳したことがつぎの本を訳す際の準備になる。知識が蓄積し、表現力が向上していく。そういう仕組みがなければ、翻訳という曲芸をうまくこなすことはできないかもしれない。

### 名訳

津森優子

#### - 村上春樹/小川高義訳 R・シャパード/J・トーマス編 『Sudden Fiction 超短編小説70』

アメリカを代表する作家 70 人のショートショート集を村上春樹と小川高義が分担で訳している。二人の訳の美点とちょっとした問題点を見ていく。

### ひとさまの誤訳 (第九回)

柴田耕太郎

#### - 『飛行士たちの話』 (永井淳訳、ロアルド・ダール作、早川書房刊)

さすがは大ベテラン、永井淳。ねちっこく見たが、誤訳も悪訳もほとんどない。翻訳職人といったところか。では、重箱の隅をつついてみよう。

**翻訳通信** 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

**定期購読の申し込みと解除** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

**バックナンバー** <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

## 翻訳という曲芸

### 代講としての翻訳

こんな場面を思い浮かべてみよう。突然、有名な先生の代講をしてくれないかという依頼がくる。事情を聞くと、アメリカで評判になった連続講義を日本でも行っているところだが、先生が急病で倒れ、代わりに講義してくれる人が必要になったのだという。幸い、アメリカでの講演のテープとそれを起こした英文原稿があるので、同じ内容を講義すればいいという。どういう人たちが何人ぐらい受講するのかを聞き、テープと原稿を送ってもらい、代講がはたして可能かどうかを考える。

講義の内容は決まっているのだから、それほど問題はないように思える。だが、講義がうまくいくかどうかは、内容だけで決まるわけではない。何をしゃべるかと変わらないほど、どうしゃべるかが重要だ。たとえば、いかにも自信なげだったり、その分野についての無知をさらけ出すような言葉を使ったりすれば、受講者が白けるに決まっている。それに、質問にうまく答える必要もある。

このように考えてみると、翻訳とはどういう仕事なのか分かるかもしれない。読者が何かを学ぶために読む本を訳すのであれば、翻訳者は原著者の仮面をかぶって、読者にその内容を教える立場に立つ。読者が楽しむために読む本を訳すのであれば、翻訳者は原著者の仮面をかぶって、読者に楽しんでもらうように最善をつくす。これが翻訳である。

もちろん、翻訳には代講と違う面もある。いつの時代にも、どの分野にも、ベテランの代役として新人が起用され、大成功を収めて一躍スターになった話がある。スター選手が故障したときに代役に起用されて活躍し、レギュラーの座を奪った野球選手やサッカー選手、ベテランが急病のときに代役に選ばれて衝撃のデビューを飾った俳優や音楽家の話はいくらかもある。だが、翻訳者が一躍スターになることはない。いってみれば一生代役である。だから地味な仕事なのだが、だから面白い仕事でもある。自分で書けば、うまくいっても三流のものしか書けないのに、翻訳なら一流のものを読者に伝えることができるのだ。

### 調べ物という冷や汗物

4 番打者が故障して急遽代役に起用された若手は、

準備万端整っていないから。あわてて相手投手の球種やクセを研究するようではいけない。主役の俳優が急病で倒れたときに代役に起用された若手は、準備万端整っていないから。あわてて台詞を覚えるようではいけない。

翻訳ではそうはいかない事情がある。音楽や演劇ではないから、同じものを繰り返し訳すことはない。それに、もちろん例外もあるが原則としては、訳者が自分で書ける程度のものを翻訳する理由はない。知らなかった事実や、考えたこともなかったアイデアや、わくわくするような世界があるから翻訳する意味がある。だからいつも、準備万端整っているとはいえない部分が出てくる。知らなかった事実や世界の話が原文にでていると、冷や汗をかきながら必死になって調べる。

では何を調べるのか。翻訳だから訳語を調べるというのが常識的な答えだろう。だが翻訳はそう簡単ではない。たとえば原著に stereolithography という言葉が使われていて、この言葉を知らなかったとしよう。辞書を調べれば、「光造形法」などの訳語があることがすぐに分かる。訳語が分かれば訳文らしきものは書ける。だが、だから翻訳はこわいのだ。言葉は記号だから、意味を知らなくても使える。おしゃま女の子や生意気ざかりの男の子が聞きかじった言葉を使って背伸

# 進化大全

ダーウィン思想: 史上最大の科学革命 Evolution  
The Triumph of an Idea  
カール・ジンマー [著] 渡辺政隆 [訳]

B5判変型  
オールカラー500ページ  
写真・図版類150点

進化理論の  
歴史から  
最先端までを  
網羅した一冊。



●定価 6,000円(税込み) ISBN 4-334-96173-8

光文社 〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6  
<http://www.kobunsha.com>

びしているのをみれば、意味を知らない言葉でも使えることが実感できる。知らない言葉を使って訳文らしきものを書くと、原文の意味が分かったように思えてくる。どんなにみともない間違いをしても、読者に意味が伝わるはずがなくとも気づかなくなる（書いた本人が意味を理解していないのだから、読者に伝わるわけがないのだが）。だから、訳語が分かって、それは出発点にすぎない。訳語を手掛かりに、その言葉が使われる世界を理解するために調べる。

翻訳のためだから、適切な訳語を使って適切な訳文が書けるようにすることが目的だが、それには事実を調べ、世界を理解しなければならない。翻訳の世界ではこうした作業を「調べ物」ということが多い。

調べ物というのは要するに、訳者が自分の無知を補うために行うものだから、自慢できるようなことではない。冷や汗をかきながら行うものだ。だが、以前には調べ物は得意だと自慢する人もいた。アメリカの金融市場の動きを紹介する翻訳書の「訳者後書き」にそういう自慢が書いてあって、苦笑したことがある。その本にはたくさんの訳注がついていたが、その本の想定読者層を考えると、大部分が不要だと思えた。同じテーマの記事を新聞で読んでいれば分かるはずのことに訳注がついていたのだ。その訳注を読んでいて気づいた。訳者は金融市場について何も知らないのだ。その証拠に、訳注のうちかなりの部分は間違いか不適切だったのだ。この訳者が代講を引き受けたら、受講者は白け、苦笑して席を立つのではないだろうか。

最近では調べ物が得意だと自慢する翻訳者にあまり出会わなくなったように思う。考えてみれば当たり前のことだ。インターネットに大量の情報があり、検索サイトを使えば簡単に検索できるので、調べ物が以前とは比較にならないほど簡単になったのだ。簡単にできることを自慢するわけにはいかない。

## 翻訳という曲芸

翻訳者の立場は前述のような代講を引き受けた人に似ているが、翻訳はもちろん、「話す仕事」ではない。「母語（日本語）でものを書く仕事」である。その点で小説家や評論家、新聞・雑誌の記者の仕事に似ているといえる。

ものを書く仕事をする人はたいてい、書いている時間よりも、構想や調査、研究などに費やしている時間の方が長い。たとえば最近翻訳したジェームス・アベグレン著『新・日本の経営』は、著者が50年にわた

る日本企業研究の集大成として、10年近い期間をかけて調査し、研究してきた結果だ。執筆の期間はおそらくせいぜい半年だから、執筆の10倍以上の時間を調査と研究にかけていることになる。

翻訳者は1冊の本を訳すのに10年もかけることはできない。せいぜい数か月で訳す。だから、調査にかけられる時間もはるかに短い。その点を考えると、翻訳という仕事が容易ではないことが、ある程度まで実感できるのではないだろうか。翻訳者が原著者の仮面をかぶって、読者にその内容を伝えたり、楽しんでもらったりすることがなぜ可能かが不思議になってくるのではないだろうか。

翻訳が可能なのは何よりも、原著者が優秀で、原著がすぐれているからだろう。いいかえれば、すぐれた原著だけが翻訳されるからだろう。原著者はたとえば10年間の調査・研究の成果を凝縮して、想定した読者が理解できる書籍という形で提示する。想定読者が理解できるように書かれてあれば、そして翻訳者が想定読者と同等以上の知識と理解力をもっていれば、翻訳は不可能ではない。

もうひとつの要因として、原著者が調査・研究に費やした10年間に、翻訳者が遊んでいたわけではないことも強調しておくべきだろう。フィクションでもノンフィクションでも、すぐれた原著はひとつの世界を作り上げている。たいていの場合、本を買って読みさえすればその世界に入れるわけではない。ある水準、ある範囲、ある種類の知識や言語能力、感性などが必要になる。そして翻訳の場合には、原著を読んで、原著者が作り上げた世界に入るだけでは不十分であり、その世界を母語で再現する力がなければならない。原著者が調査・研究に費やした10年間に、翻訳者は遊んでいたわけではなく、原著に近い分野の翻訳をしている。そして、冷や汗をかきながら必死に調べ、表現を磨いてきている。その蓄積によって、原著者の作り上げる世界を理解する能力、母語で再現する表現力をかなりの程度まで獲得できているのである。

原著の想定読者層があまり重ならない本をばらばらに訳していったのではそうはならないかもしれないが、想定読者層がかなり重なる本をつぎつぎに訳していけば、ひとつの本を翻訳したことがつぎの本を訳す際の準備になる。知識が蓄積し、表現力が向上していく。そういう仕組みがなければ、翻訳という曲芸をうまくこなすことはできないかもしれない。

## 村上春樹/小川高義訳 R・シャパード/J・トーマス編『Sudden Fiction 超短編小説 70』

『Sudden Fiction 超短編小説 70』(文春文庫、1994)はアメリカ作家 70 人の作品が一編ずつ収められたショートショート集だ。生活の断片を切り取ったような作品もあれば寓話的な作品・冒険的な作品もあり、さまざまな作風が味わえる。さらにはショートショートというジャンルに対する作家たちの考えをまとめた覚え書も添えられていて興味深い。

本書はご存じ村上春樹と、本誌でも『さゆり』の訳で取り上げられた小川高義が分担で訳している。全体的に日本語の短編集として楽しめる内容になっているが、中でも名訳の冴えが感じられる部分を紹介していこう。

まずは村上春樹訳「ジャズの王様」(ドナルド・バーセルミ作)。この作品は、ジャズの王様(ジャズ界の名プレイヤー)になったトロンボーン奏者の愉快な一日を、底抜けにゴキゲンな調子で描き出している。村上訳はそのゴキゲンさ加減を、あますところなく再現している。

ホーキー・モーキーはトロンボーンをケースにしまって、演奏に出かけた。ステージではみんながお辞儀をして、彼に道を開けた。

「ようバッキー、ようビート、ようフレディー、ようジョージ、ようサッド、ようロイ、ようデクスター、ようジョー、ようウィリー、ようグリーンズ」

「俺たち何を演奏すればいいかな、ホーキー？ あんたがジャズの王様だから、あんたが曲を決めるんだよ」

「『スモーク』でどうだい？」

「わお！」とみんなが言った。「おい、聞いたかよ？ ホーキー・モーキーはひと言口を開くだけで人をノックアウトすることができるんだぜ。なんてすげえイントネーションなんだ。ええい、まいったぜ」(p.40~41)

Hokie Mokie put his trombone in its trombone case and went to a gig. At the gig everyone fell back before him, bowing.

“Hi, Bucky! Hi Zoot! Hi Freddie! Hi George! Hi Thad! Hi Roy! Hi Dexter! Hi Jo! Hi Willie! Hi Greens!”

“What we gonna play, Hokie? You the king of jazz now, you gotta decide.”

“How about ‘Smoke’?”

“Wow!” everybody said. “Did you hear that? Hokie Mokie can just knock a fella out, just the way he pronounces a word. What a intonation on that boy! God Almighty!”

(原書ペーパーバック版 p.10)

常々日本語として自然な言いまわしを心がける翻訳者にはちょっと衝撃的な訳だが、この場面ではそれが見事にはまっている。まず“Hi”の連発は「よう」「やあ」「おう」「元気か」などと訳し分けることを考えそうなものだが、単純に“Hi”を繰り返すだけで許されるホーキーの存在を際立たせるには、日本語でも訳を統一してシンプルにいったほうが効果的だ。「やあ」で統一してしまったらグサイが、「よう」なら大人の男の気安さが伝わってくる。

“Wow!”の「わお！」にはノックアウトされてしまった。「すげえ」などのほうが日本語としては自然に決まっているが、この登場人物は日本語をしゃべっているわけではない。村上訳は英語でしゃべっているニュアンスを忠実に日本語で伝えているのだ。このようにアメリカ文化丸出しのテキストでは、こんな訳し方も読んでいて楽しい。“God Almighty!”の「ええい、まいったぜ」も大げさな雰囲気がよく出ている。

この作品には、ジャズファンによくいるタイプの、やたらと蘊蓄を語る客が登場する。この客がわけのわからない比喩を駆使してホーキーの演奏を褒め上げ、読者を笑わせてくれる。

「ああこれが世に名高いホーキーの『英国の日の出』風演奏だ。いろんな光線がそこから射してくるんだよ。赤い光線とか、緑の光線とか、紫の中心から生じる緑とか、タン革色の中心から生じるオリーブ色とか……」(p.42)

“Yes, that’s Hokie’s famous ‘English sunrise’ way of playing. Playing with lots of rays coming out of it, some red rays, some blue rays, some green rays, some green stemming from a violet center, some olive stemming from a tan center –” (p.11)

some...some...の繰り返しには「~とか、~とか」がぴったりだ。村上春樹の訳を読む楽しみは、この心地よいリズムにある。音楽が主題の作品では、その持ち味が十分に発揮されている。

次は小川高義訳「ピグマリオン」(ジョン・アブダイク作)の冒頭部分を見てみよう。Memoirs of a Geisha を流暢な京言葉で訳してみせた小川高義は、簡潔な文体もうまい。

最初の妻は、物真似のうまいところが楽しかった。自宅のパーティでも他所のでも、お開きのあとには、さっきまで一緒だった顔や声色を、妻がありありと甦らせて

くれた。かわいい口元を小刻みにねじ曲げると、もう姿を消した知り合いが、また姿を現わしたようで、一瞬、はっと惑わされた。「うーんと、もし、ほんとにグウェンで、どんなしゃべり方だっけ？　もし、ほんとうに自然ほごが大事ならあ……」と聞かされたら、夫たるもの、そのグウェンを密かに愛人としていて、いずれグウェンが次の妻になるのだとしても、おおいに笑えるのだった。(p.91)

What he liked about his first wife was her gift of mimicry ; after a party, theirs or another couple's, she would vivify for him what they had seen, the faces, the voices, twisting her pretty mouth into small contortions that brought back, for a dazzling instant, the presence of an absent acquaintance. "Well, if I reaw - how does Gwen talk? if I re-awwy cared about conservation - -" And he, the husband, would laugh and laugh, even though Gwen was secretly his mistress and would become his second wife. (p.33)

for a dazzling instant は訳しにくいフレーズだが、「一瞬、はっと惑わされた」はそのニュアンスをよく伝えている。原文の構造にこだわらず述部を持ってくることで、日本語として自然に流れる文章になっている。

妻がグウェンのしゃべり方を真似るところでは、reawwy (really)や conservation (conservation)から、舌足らずな口調がうかがえる。小川訳ではひらがなを上手にを使って、その雰囲気や適確に表現している。

注目すべきは、he がまったく訳されず、モノローグ風に綴られていることだ。これは翻訳上の一種の仕掛けで、2 ページ目の終わりに「ピグマリオン」という主人公の名前が出てくるまで、「彼」は一度も使われていない。こんな仕掛けをつくってみるのも、翻訳の楽しみではないだろうか。それにしても、代名詞なしでうまく処理している。he, the husband を「夫である彼/自分」ではなく「夫たるもの」とは、なかなか訳せないものだ。

丸谷オーも指摘しているように、あまり人称代名詞を多用すると日本語として不自然になりやすい。だが村上春樹の訳では(訳だけでなく自作の小説でも)、「彼」「彼女」が多用されている。それでもあまり気にならないのは、リズムがよく、論理的で明快な文章になっているからだろう。それに、人称代名詞を直訳してばかりいるわけではない。「鶉」(ロルフ・イングヴィ作)を例に見ていこう。

彼らが結婚した最初の年の春だった。まばゆい緑の中にライラックの花が開くほんの少し前に、鶉[うずら]がやってきた。その年の最初のあたたかな朝だった。霜も降りず、朝露が目につくだけだった。ベッドの上で太陽

の光を感じて、彼女はいつもより早く起きた。そして裏庭に鶉の姿を見かけると、夫を起こした。見ると、八羽の鳥が家主の庭で地面をひっかいてはくちばしでつついていた。

あれはカリフォルニア・ウズラだよ、と夫は妻に教えた。雌鳥は威厳のある貴婦人のように見えた。ぼちゃっとして、非の打ちどころなくみごとに茶色と灰色を着こなしていた。彼女たちは三羽のでっぴりとした雄にエスコートされていた。彼らは胸に灰色のベストを着こみ、喉には黒い羽毛のアスコット・タイをあしらっていた。それぞれの鳥の額からは黒く長い羽がびよんと跳ねるように飛び出していた。(p.455)

The quail came just before the lilacs bloomed in the green time of their first spring married. The morning was the first warm morning with no frost, only dew. Feeling sun on the bed she rose earlier than usual; when she saw the quail in the backyard she woke him. He saw eight birds scratching earth and pecking in the landlord's garden.

He told her they were California Quail. The hens were like dowager women, plump and impeccably arrayed in brown and gray. They were escorted by three portly males with gray-vested chests and an ascot of black plumage at their throats. Each bird had one black plume feather bobbing on the forehead. (p.209)

「彼ら」「彼女」と始まっているが、she woke him は「夫を起こした」となり、He saw は「見ると」となり、主語が省かれている。he told her の he と her は「夫」と「妻」に置き換えられている。ここで「彼」「彼女」を連発すると、鶉を「彼女たち」「彼ら」と訳したときに、読者が混乱しかねない。鶉を「雌鳥たちは」「雄鶉たちは」と訳す手もあるが、擬人法のおかげで鶉を「彼女たち」「彼ら」と呼んでも違和感がないのが面白いところだ。

英語では her husband, his wife と書いたら長たらしくなるので he, she ですませているが、日本語では「彼」「彼女」「妻」「夫」の字数はほぼ同じで、リズムを損なわない。村上はそのあたりの感覚を心得ている。

このような名訳がずっと続けば言うことなしなのだが、残念ながらところどころに、読んでいて戸惑ってしまうような訳も見られる。そうした訳を詳しく見ていくと、原文がすっかり頭に入った翻訳者なら誰しも陥りかねない問題に気づく。

まず村上訳「生活の中の力学」(レイモンド・カーヴァー作)の最後の部分。別れる男女が赤ん坊を奪い合っている場面だ。女の抱いている赤ん坊を男が力づくで奪った後で、次の一節が続く。

この子は放すもんか、と彼女は思った。彼女は赤ん坊の一方の手を掴んだ。彼女は赤ん坊の手首を握ってうしろに身を反らせた。

でも彼は赤ん坊を放そうとはしなかった。彼は赤ん坊が自分の手からするりと抜け出ていくのを感じて、力まかせに引っ張り返した。

このようにして、問題は解決された。(p.164)

「彼女は赤ん坊の手首を握ってうしろに身を反らせた」は「赤ん坊の身を反らせた」と読める。彼女が赤ん坊の手を握って身を反らせ、彼が力まかせに引っ張り返す。その結果は、両者の一步も譲らぬ引っ張り合いなのか、彼の勝利なのか、この訳でははっきりしない。

だが原文を見ると She caught the baby around the wrist and leaned back. (p.69) とある。彼女が lean back したのだ。lean back は足を踏ん張って体重を後ろにかける、綱引きのような姿勢。これで強烈な引っ張り合いであることは、原文読者には一目でわかる。だから最後の行が生きてくる。

「彼女は赤ん坊の手首を握り、うしろに身を反らした」とすれば、赤ん坊の身を反らせたのでは、という誤解は避けられる。だが「身を反らす」のは背中をうしろに湾曲させる感じで、lean back の語感とずれる。訳しにくいところだが、「体重をかけて思いきり引っ張った」くらいが妥当だろう。

次は、小川訳の「ごく短い話」(アーネスト・ヘミングウェイ作)から。ここに出てくる「彼」はアメリカに戻って仕事を見つけ、恋人の「ルーズ」をイタリアから呼び寄せで結婚する予定でいる。

彼はジェノヴァから船でアメリカへ行った。ルーズは病院を新設するボルデノーネへ引き上げた。さびしい雨がちな町で、精鋭の一個大隊が駐屯していた。ぬかるんだ雨の町で冬を過ごすうちに、大隊の少佐がルーズに言いよった。彼女には初めてのイタリア人だった。そのうち彼女は、あれは恋愛ごっこだったとアメリカへ手紙を書いた。申し訳ないし、わかってもらえないかもしれないが、いつかは許す気になって、むしろ恩にきたくなるだろう。思ってもみなかったが、春には結婚しそうだ。好きなことは好きだけれど、やっぱり恋愛ごっこだったと思う。立派になってほしい。そうなる人だと信じてる。これがいちばんいいことだ。(p.290~291)

人称代名詞が省略されすぎて、人間関係がよくわからなくなっている。「あれは恋愛ごっこだった」のはイタリア人の少佐とのことなのか、アメリカにいる彼とのことなのか。原文を見てみよう。

...the major of the battalion made love to Luz, and she had never known Italians before, and finally wrote to the States that theirs had been only a boy and girl affair. She was sorry, and she knew he would probably not be able to understand, but might someday forgive her, and be grateful to her, and she expected, absolutely unexpectedly, to be married in the spring. She loved him as always, but she realized now it was only a boy and girl love. She hoped he would have a great career and believed in him absolutely. She knew it was for the best. (p.127)

wrote to the States の直後に過去完了形で that theirs had been only a boy and girl affair とあることから、アメリカにいる「彼」(いまやかつての恋人)とのことを言っているのだとわかる。だが、訳文では「初めてのイタリア人だった」の後で「あれは恋愛ごっこだった」とあるので、イタリア人とのことを言っているのかと思ってしまう。その後の手紙の内容も代名詞が徹底的に省略されているので、どちらの相手のことを言っているのかははっきりしない。

ここはやはり、ある程度代名詞を入れたほうが親切だ。少し足せば、状況がずっと飲みこみやすくなる。「あれは恋愛ごっこだった」は「あなたとは恋愛ごっこにすぎなかった」、「好きなことは好きだけれど」は「あなたのことは変わらず好きだけれど」、「立派になってほしい」は「あなたには立派になってほしい」としてはどうか。

最後の「これがいちばんいいことだ」は、「立派になる人だと信じてる」ことが「いちばんいいことだ」と読めてしまうが、She knew it was for the best. の it は「アメリカ人の彼と別れてイタリア人の少佐と結婚すること」を指す。これを誤解のないように訳すなら「こうするのがいちばんなのよ」、もう少し踏み込んで訳すなら「おたがい、このほうがいいのよ」といったところだ。

こういう箇所を見ると痛感する。翻訳者は原文から頭を切り離し、訳文だけを読む読者の視点に立って、誤解を与えないかどうかチェックしなければならないと。時には村上・小川のような名訳者でも陥る問題なのだから、よほど気をつけないといけない。

## 『飛行士たちの話』(永井淳訳、ロアルド・ダール作、早川書房刊)

さすがは大ベテラン、永井淳。ねちっこく見たが、誤訳も悪訳もほとんどない。しいて文句をいえば、文章のそっけなさが、物足りない。さっさかと筆を走らせ枚数を稼いでいる、の感がある。翻訳職人、マイスターといったところか。

では、重箱の隅をつついてみよう(永井訳、原文、わたしのコメント、の順。本作品集は 11 の短編より成る)。

## 『アフリカの物語』

p39

北のほうには白雪をいただくケニア山が聳え立ち、冷たい風が嵐を呼び、うすい白い粉を吹きおろす山頂から、羽毛のような白い縞模様をしたたらせていた。

Away in the north stood Mount Kenya itself, with snow upon its head, with a thin white plume trailing from its summit where the city winds made a storm and blew the white powder from the top of the mountain.

コメント：直訳すれば、「北の向こうにケニア山がそそりたち、上のほうに雪をかぶっており、the city winds が嵐をつくって山の頂から白い粉を吹く頂上から雪をうすい白い羽毛のようになびかせていた」このあたり便宜的に二文に分解すると、

A thin white plume is trailing from its summit.

The city winds made a storm and blew the white powder from the top of the mountain in the summit.

from が重なるのと、同義語 top と summit が重なる点、これは悪文ではないか。また the city wind の意味が、調べても分からない(「きままな風」という感じかなとも思うが、分かる方おられたら、教えてください)。

それで永井は、上の訳のように誤魔化したのだろうが(実に、分からないところは、誰にとっても同じなのだ。フランス語原本で意味のわからない箇所を英訳本にあたったところ、やはり曖昧に訳してあった、との中村真一郎の述懐を以前読んだことがある)、この訳文では「冷たい風が嵐を呼び」がどこに掛かるか分からないので、ひょっとしたら誤訳では?と邪推されてしまう。原意をつかみきれない自信のなさが現れてしまったのだろう。誤魔化しは、堂々とやるべし。

「渦巻く風が嵐となって白い粉...」とでもしたら、うまく誤魔化せるのではないか。

## 『簡単な任務』

P55

## ブレナム機の連中

..., where the Blenheim boys were helpful ...

コメント：イギリスの双発軽爆撃機のこと。はじめはドイツ読みで「ブレンハイム」だったが、のちに英語読みで「ブレナム機」とされるのが普通。

p55

出撃回数は多すぎたし、補充兵は送られてこなかった。

They were having to go out too often, and there were no replacements coming along.

コメント：補充兵でなく、補充のパイロットのこと。「交代要員」

p56

「爆撃機の連中はふさぎこんでいる」

「そんなことはないさ」と、わたしは答えた。

「じゃあ、うんざりしているんだ」

「違う。連中は疲れてるんだ。それだけだよ。しかし、連中は飛びつづけるだろう。...」

‘Bomber boys unhappy,’ Peter said.

‘Not unhappy,’ I answered.

‘Well, they’re browned off.’

‘No. They’ve had it, that’s all. But they’ll keep going. You can see they’re trying to keep going.’

コメント：happy、browned off、have had it の意味はそれぞれ似たようなものだが、度重なる出撃に嫌気がさしている。ここは会話が流れるように訳語を選びたい。

「爆撃機の連中は暗いな」とピータがいう。

「そんなことないさ」とわたし。

「じゃ、機嫌が悪いんだ」

「違う。うんざりしてるんだよ。それだけさ。でも飛び続ける。飛び続けようとしているのわかるだろ」

p57

「わけない仕事なんだよ」と、わたしはいった。

「そうとも」

‘Piece of cake,’ I said.

‘Like hell.’

**コメント：**like hell はイディオムで「まさか」「お茶の子、サイサイだ」と、わたしは言った。  
「とんでもない」

p59

命令は全身に、脳や腕や胴体のすべての筋肉に中継され、筋肉が行動を開始した。

The order was relayed to the whole system, to all the muscles in the legs, arms and body, and the muscles went to work.

**コメント：**ケアレスミスもたまにはご愛嬌。  
「脳」 「足」

p59

わたしの脳が命令を受けとって動きはじめた。  
My arms received the message and went to work.

**コメント：**荒い手書きだと、脳と腕は同じに見える。  
和文校正のミスだろう。  
「脳」 「腕」

p60

ピンが抜けてベルトがはずれた。さ、脱出するんだ。  
脱出するんだ。だが、それができない。操縦席から体を浮かせるのがやっとだった。

Out came the pin and the straps were loosed. Now, let’s get out. Let’s get out, let’ get out. But I couldn’t do it. I simply couldn’t lift myself out of the cockpit.

**コメント：**simply が、否定語の前で「絶対に」の意味となるのは、初等文法。永井淳のような大ベテランでも知らないことがあるのに、かえって安心。  
留め針がとれて、ベルトがはずれた。よし、脱出だ。  
脱出だ、脱出だ。でもできなかった。操縦席から体を持ち上げることがまるでできなかった。

p66

なおも敵機は接近してきた。目の前にぐんぐん近づいてきて、見えるのはメッサーシュミットの機体の色と、青空をバックにくっきりと浮きあがった黒い鉤十字だけになった。

Still they flew closer. They came nearer and nearer, right up in front of my face so that I saw only the black crosses which stood out brightly against the colour of the

Messerschmitts and against the blue of the sky;

**コメント：**読点の打ちかたが悪い。「機体の色」と「鉤十字」が並列するのではなく、「機体の色、青い空」に対し「鉤十字」が映えているのだ。  
だが敵機は接近してきた。目の前までぐんぐん近づいてきた。機体の色と空の青さに映えて、黒い鉤十字だけが浮かびあがって見えた。

『マダム・ロゼット』

p77

「早いとこ出てくれよ」と、隣室から声がかかった。  
「なあ、スタッグ、あんたは一時間以上も入っているんだぜ」スタッフィは裸かになってベッドの縁に腰かけ、ウィスキーをちびりちびりやりながら順番を待っていた。

‘For God’s sake, get out,’ said a voice from the next room. ‘Come on, Stag, you’ve had over an hour.’ Stuffy was sitting on the edge of the bed with no clothes on, drinking slowly and waiting his turn.

**コメント：**元のままでも悪くはない。だが、中間話法と現在形をうまく使えば、この場面を生き生きさせることができる。

頼むからいいかげん出てくれよ、早くさあ、もう一時間はたつんだぜ、と向こうの部屋から声がした。  
スタッフィが裸のままベッドの端に腰かけ、自分の番を待ってちびちび酒を飲んでいる。

P119

驚くべきことに、彼は唇を動かさずに声で微笑することができた。

It was an extraordinary thing because he could make a kind of smile with his voice without smiling with his lips.

**コメント：**この because は that の意味。lips は、唇そのものだけでなくその周辺も含む。訳文、わかりにくい。すこし説明的に訳したほうがよいだろう。

彼がほほえむことなしに、声でもって一種の笑いをつくることができるのは実にすごいことだった。

P122

みんな美人ぞろいで、年も若く、十人十色、みなそれぞれに個性的だった。ギリシャ人、シリア人、フランス人、イタリア人、陽気なエジプト人、ユーゴスラヴィア人、そのほかいろんな国の人間が集まっていたからだが、とにかくみんな美人ぞろいだった。  
They were good-looking girls, young and good-looking,



all different, completely different from each other because they were Greek and Syrian and French and Italian and light Egyptian and Yugoslav and many other things, but they were good-looking, all of them were good-looking and handsome.

**コメント：**語義選択の誤り。民族を列挙しているのに、なぜエジプト人だけ「陽気な」と形容しなければならないのか、と疑問をもつべきところ。ここは、エジプト人といっても浅黒い人種のほうでなく、色の白いほうの人種だ、といている。

色白のエジプト人

『カティーナ』

p142

われわれはカティーナのために用意しておいたテントを見せ、フィンが前の晩アテネでなにやら謎めいた手段で手に入れた小さな木綿のパジャマを見せた。We showed her the tent which we had prepared for her and we showed her the small cotton nightdress which Fin had obtained in some mysterious way the night before in Athens.

**コメント：**この mysterious は、そんなおおげさなものでない。

我々はカティーナのために用意したテントを見せた。そして前の晩にアテネでなにやらわけありの方法でフィンが手に入れた木綿の寝巻きを差し出した。

『この子だけは』

p230

それは微笑を浮かべた、いかにも息子が母親に送りがたがるような写真で、細くて黒い木の額縁に入っていた。

It was a smiling photograph, the kind that one likes to send to one's mother and it had a thin, black frame made of wood.

**コメント：**smiling は、写真自体でなく、内容物が微笑んでいることを示す。

それは微笑んでいる写真で、息子がよく母親に送りがたがる種のもので、木製の薄い黒い額に入っていた。

p233

彼女はすぐそばにいて、あたかもひたむきに首をのばして飛んでゆく鳥のように、機首をほかの部分よりはるか前方に突きだした飛行機を見ることができた。

She was so close to it and she could see the way in which the nose of the machine reached out far ahead of everything, as though the bird was craning its neck in the eagerness of its passage.

**コメント：**機首が先頭にあるのは当たり前だから、機体のほかの部分と比べているわけではあるまい。everything は、比喻の一種で、「なにものよりも」の感じ。

彼女はすぐそばにいたので、その飛行機の先端があらゆるもののずっと前に突き出ている様子をみることができた。それはあたかも鳥がはやく向こうへ着きたいとの一心で、首を長く長く伸ばしているかのようであった。

『あなたに似た人』

p240

イギリス本土が静かだったころは西アフリカの砂漠にいたし、...

He was in the Western Desert when we had nothing and ...

**コメント：**W、D とともに大文字で、固有名詞化。the Western Desert は、(1)英軍を中心に企てられたヒトラー殲滅作戦の呼称 (2)エジプト奥地の一地域の呼称、の二つがあるが、ここは場所が列挙されているので、(2)ととるのがよいだろう。have nothing は、事実関係からして上のように踏み込めるのかどうか...

状況が落ち着いていた頃は、彼はエジプトの奥地にいた。

英語を学びなおしたい人にとって絶好の再入門書

**翻訳力錬成テキストブック**

**柴田メソッドによる英語読解**

**柴田耕太郎著**

定価 10,290 円 (本体 9,800 円) A5 版・680p

課題の例文は定評ある 100 編の名文を選定  
実践的な翻訳技術養成講座

**日外アソシエーツ**

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

p240

目は黒く澄んでいて、相手の目をのぞきこむときのほかはいっときもじっとしていない。

...his eyes were bright and dark. They were never still unless they were looking into your own.

**コメント：**じっとしている、の主体が「彼の目」でなく「彼自身」と訳文からは取られそう。unless 以下は、「～の場合でもなければ」と可能性が極めて少ないことがくる。

目は黒くぱっちりとしていた。そして相手の目をのぞきこむときでもなければ、じっとしていることはなかった。

p242

出撃のたびにおれは自問するんだ。こいつらにしようか、あいつらにしようか。いちばん悪いやつらはどっちだって。

Each time I go out, I say to myself, shall it be these or shall it be those? Which ones are the worst?

**コメント：**二者択一だから、「いちばん」とは日本語ではいわない。「悪い」では、相手が全部「悪人」のように読めてしまう。ここは爆撃で、本来必要な以上の余計な犠牲をださずにすむのはどちらかと自問しているところ。「望ましくない事態をもたらす」ことを worst といってる。

出撃するたびに、自分の心に問い掛けるんだ。こっちか、あっちか。どっちのほうがまずいだろう、って。

p247

「くだらんよ。要するに自分だけのことで、他人には関係ないのさ」

‘Balls. That’s just personal. Doesn’t affect anyone else.’

**コメント：**that は、直前に相手が例として出した、舗装の亀裂をよける事、を指す。そんなささいなことと、爆撃のポイント選択で犠牲対象が大きくかわってしまう事とは、比べられないといっている。

「冗談じゃない。そんなの個人的なことだろ。誰にも影響を及ぼすわけじゃない。」

## ＊ ＊ 今春開講 柴田耕太郎 主宰 「翻訳ジム」 受講生募集のお知らせ ＊ ＊

3月1日開講、1年間徹底して英文を読み解く全日制「翻訳ジム」のお知らせです。

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現

場を踏んだ人間でなければわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。

人生のなかの1年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

株式会社アイディ

柴田耕太郎 主宰 『英文教室』

詳細は <http://www.wayaku.jp>

事務担当 前川

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email : [eibun@id-corp.co.jp](mailto:eibun@id-corp.co.jp)

〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル